

わがまち歴史散歩

小林一三と敗戦必至に向かう戦局

「戦争は勝たねばだめだ」

昭和20(1945)年2月19日硫黄島への米軍上陸を受け小林一三は、3月8日、戦争は「勝ねば駄目だ、勝つためには一億一心、今日までのイデオロギーを捨て、軍官民一致、真剣になり得る国内体勢を、一日も早く樹立なし得る内閣が出来なければ駄目だ」と日記に書いた。彼は池田に住んでいたが、商工大臣を経験し、このときには現役の貴族院議員であった。彼は困難な戦局の中でも戦争勝利を唱え、さまざまな情報を求め、あるべき戦争政策を追求し続けていたのである。それは、まさしく現実立脚しようとする彼の思考そのものであった。

戦争政策の批判へ

3月、西太平洋上のマリアナ基地から発進したB29による東京・名古屋・大阪・神戸など大都市への大規模空襲があり、続いて4月初めには米軍の沖縄侵攻作戦が始まる。軍と政府は沖縄戦こそ戦争の帰趨を決する「天王山」だとして国民の戦意高揚を図る。

小林一三は、戦局の真実をつかむため、苦勞をもとめず、陸海軍の戦局報道を日記帳に

書き写し、コメントを付していった。肝心な点は、戦局が勝ちに向かっているのか、敗北に向かっているのかである。だが、それは少しも明瞭にならない。

しかし、6月になると、沖縄の敗戦は否定しがたくなってくる。すると、軍は「日米決戦の全局を決定する」とまで国民意識をおおっていた沖縄戦の意義を相対化し、敗戦の意義を過小評価し始める。ここにおいて小林一三は、「国民を馬鹿にした軍の責任」を厳しく批判するに至るのである(以上6月28日)。そして、同じころから、戦争勝利に向けた政府や政治家の活動に対する懐疑的態度も強まってくる。

指導的立場にある人々が「戦争の苛烈なるに」事よせて、「責任を国民に

転嫁し、恬然たる弊なきや」との『東洋経済雑誌』の記述に賛意を表し(7月28日)、軍や官の間に広がっている数字合わ



昭和15年頃の小林一三
(公益財団法人 阪急文化財団提供)

戦時下の文化活動

せの観念論や机上の空論を具体的に指摘し、また、米英両国の合理主義的作戦を指摘し、それを考慮しない議論を厳しく批判する。

すでに国民義勇隊(女子や少年・高齢者などを総動員して米軍と対峙させる計画。実際には竹やりの訓練くらいしかできなかった)のことを批判していた(6月2日)が、沖縄戦敗北後は連合軍上陸地点推測のこと、原爆投下のこと、ソ連参戦のことと続き、やがて、敗戦は必至のものとして、その観点から戦争の推移を見守る姿勢に変わっていくのである。

小林一三は、戦時下宝塚や東宝の演劇活動を戦争勝利に向けて役立たせることを真剣に考

え続けていた。「芸術報国」を考え、戦争勝利に貢献する演劇のありようを追求した(3月21日)。物資の欠乏する中にも茶会を欠かさなかった。一方、空襲時の体験を重ねるうち、敵が焼夷弾攻撃を仕掛けてきたときには軍の指導に反して、窓を閉め切って飛び火の侵入を防ぐ方向に転じている。

小林一三は東洋文化に対する欧米諸国の人々の差別的なまなざしに注目し、いわば東洋文化の最後の砦である日本文化の尊厳と自立を守ろうとしていたのである(3月21日、6月2日)。戦争は勝たねばならないとした彼の意見の背後には、こうした東洋文化擁護の観念もあったことを知っておきたい。

ただし、ここには、日本も欧米諸国と同様、明治以降は、中国や朝鮮の文化を蔑視し、貶めていたという事実が指摘されていない。そして、ここに彼の思想を評価する重要な点があるとも思う。近代市民文化に大きな足跡を残した小林一三においても存在する思想的な背反性と複合性を、とりあえずは指摘しておきたいのである。

(市史編纂委員会委員長・小田康徳)
問合せ 歴史民俗資料館

☎751・3019